

## わ が 村

### — 北御牧における私の生活雑記 —

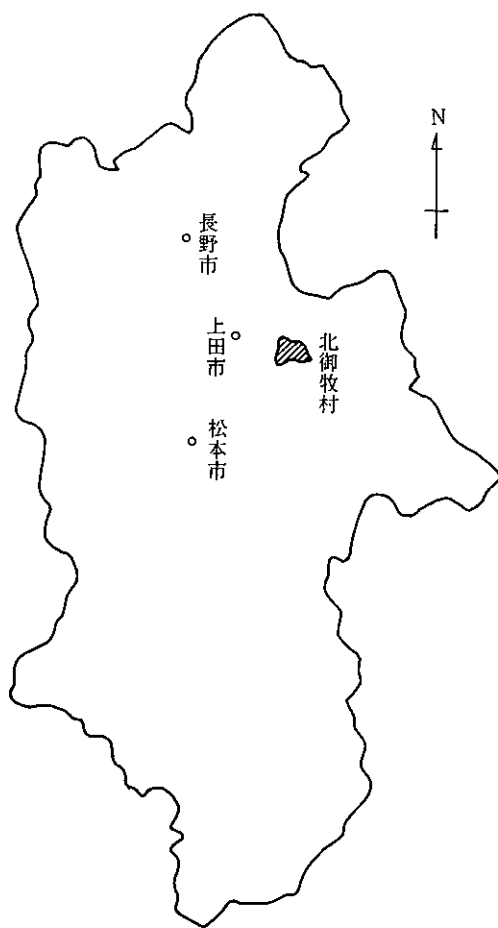
武 井 良 江

私は、たまたま去年、こちらの研究所の研究員の方がうちの地区、切久保地区へ調査に入ったときに、現地での連絡員なり、お世話係をさせていただいた関係上、そのまま駐村研究員になって、その熱気が冷めやらぬうちにここへ出てくる返事をしてしまって、男の方が多く中で、私でよかったのかとちょっと心配になっているところです。

#### (1) 私の住む村の概況

北御牧村の地図（第2図）がお手元に行っていると思いますけれども、子供たちには、チョウが羽を広げたような形をしているんだよと学校の先生が教えてくれています。なぜ北御牧村という名前がついたかという説明をしたいと思いますが、ここは昔、多分平安時代のころだと思いますが、馬の飼育場、御牧があったところなんです。隣の望月町もそうだと思いますけれども、ここから生産されたいい馬が都に連れていかれて、都の人たちを乗せたということがあったようです。私の住んでいるところは信越線の小諸と上田のちょうど真ん中に田中という小さな駅があって、そこから車で13分ぐらい立科町の方に入ったところにあります。純農村地帯で、人口は約5550人くらい、女の人の方が少し多いです。面積が約26平方キロメートル。千曲川の支流である鹿曲川が村の真ん中辺を流れていて、その両側に標高600メートルから800メートルほどの高い台地が広がって、それが農地、水田になっています。

私はといえば、東京の町田市で生まれて、独身のころ町田の小学校で教師をしていたんですけれども、たまたま長野に住むいとことのお話が持ち上がって、そこでいにと結婚して、今、純農村地帯に住んでいて、養豚場



第2図 長野県北御牧村の位置

と一緒に経営しています。お母さん豚が 130 頭ぐらいいて、年間 2000 頭の出荷を目指しています。こちらに住んでから 21 年ばかりになります。そういう女性の目で、5 人の子のお母さんの目で、そして妻の目でというか、そういう普通の女性の感覚でこれからお話しできたらいいなと思っています。レジュメに書いたのとは順番がちょっとずれるかと思いますが、お許しください。

村の子供の数なんですけれども、うちの村も年々子供の数が減っています。現在、高校 2 年の子供たちが 88 名ぐらいで、それがピークです。平成 9 年の小学校の入学者は 30 人を少し超えるくらいになってしまいます。1 クラス編制。だから、地域が活性化するという報告よりも、地域がこのようにしてだんだんさびれていきますという報告になっちゃうと困るんですけれども……。

このところ、結婚を望まない若い人たちがふえているように見受けられるんですけれども、私たちの住む農村では、結婚したくてもお嫁さんがいないという現状があります。我が村でも 49 歳までの独身の男性が 217 名です。それに対して女性の方は 68 名。だから、農村がさびれていくというのには、お嫁さんが来ないということと、もう一つ、一番大きな難問になるんですけれども、農業後継者の不足。それに伴う三つ目の要素としては高齢化。突然お年寄りがふえるのではなくて、少しずつみんな年をとっていくんですけれども、そのことも農村を弱体化させている大きな原因になってしまっているようです。うちの村では、ここ 10 年ぐらいの間で、若い人で農業後継者として就農した人はたった 1 人でした。小諸や上田が近くにあり、車での通勤が十分可能なものですから、ほとんど兼業農家としてそれぞれの都市へ働きに出るケースが多いです。

というのは、やはり村の中では、農協へ勤めるか、郵便局へ勤めるか、役場へ勤めるか、

または新しく開発された宿泊施設に勤めるか、余り働き場所がないということが挙げられると思います。ですから、先ほどの木村さんの報告はすばらしいなと思いながら聞いていたんですけれども、ああいう施設がもしできて若い人たちが村に定着できれば、人口がふえる一つの方策だなと感じていました。

それで、農業後継者の問題では、大きなお百姓ほどやはり深刻だと思います。私の長野のおいっ子たち、2 人とも男の子なんですけれども、米づくり専業農家である兄の家を継がないかもしれないですね。また、農村地帯からほかの農村へお嫁に出すときも、親が農業を娘にやらせないでくれと申し入れをするようなこと、自分が農業をやっているが、そういう申し込みをすることもあるようです。ですから、うちの親類筋からほかの農家へお嫁に行った女性も、実家のお母さんには、私は会社をやめないよ、やめたら農作業を手伝わされるだろうからと言っているそうです。

今、日本の国民の生命を支えている大もとになるのが農業だと思うんですけれども、本当にこのようにしてできるだけ農業から遠ざかり、お嫁に行った先でも農業を手伝わなかったりして、若者がうんと農業から逃げ腰だというのが私の村にも見られるし、これはもしかしたら、ほかの村だって同じようなことになっているのではないかと感じています。農村に住みたがるのは、結局、定年間近の熟年夫婦のようですね。医療制度とか医療設備が比較的整っている武石村というところがあります。ここは美ヶ原高原の上り口なんですけれども、ここが注目的のようで、老夫婦が家を建てて住み始めているらしいです。すばらしい診療所があって、またそこにすばらしい診療所長がおいでになります。

その村の健康保険料はどのくらいかという、ちょっと正確な額は忘れたんですけれども、びっくりすることに、50 万円に近い額でした。

私のうちは6人家族ですが、去年、23万円ぐらいでした。そういう村が長野県の私の近くにあるんですけれども、今度は北御牧村が、つまり私の村が脚光を浴びるような、いろいろな事業が完成しつつあったり、完成したりしているんです。それがこれからお話しすることなんですけれども、村の活性化につながればいいなと、だれもが思っていることなんです。

## (2) 特別養護老人施設（ケアポートみまき）の開設まで

ふるさと創生1億円で、まず昭和60年代に温泉ができて、公衆のおふろが開かれました。御牧乃湯といいます。村の企画課に聞きましたら、年間23万人くらいの入浴者があるそうです。でも、余り黒字にはなっていないということでした。それからあと、コテージやキャンプ場もある芸術むら公園の完成があります。

また、もう一つ新しい温泉が掘り当てられて、これは明神池のそばにあったので、宿泊施設として明神館と名づけられています。それが去年の6月に開所して、今までに7万人ほどの利用者があって、ここのところはやや黒字だそうです。でも、とても仕事が大変で、去年の12月に支配人の方がフロントに立っていて、そのままずっと静かに気絶しちゃったほど激務だそうです。

あと二つばかり有名なものが開所したんですけれども、その一つがケアポートみまきといいます。これが日本で初の保健・医療・福祉の機能を一つの施設の中に集約した上に、全室個室の特別養護老人ホームなんです。これはホテル並みの施設で、今、全国の注目の的らしくて、多くの見学者があります。その人たちのためのすばらしい応接室もあるようですが、私はまだ見ていません。この施設ができるまでには、村の長年にわたる健康管理

の取り組みがあったんですね。

それは1973年ころ、北御牧村の医療費は北佐久郡下でトップぐらいの座にのし上がってしまったんです。北佐久郡というのは、一つの市、小諸市と二つの村、北御牧村と浅科村、あと四つの町があります。御代田町、東部町、立科町、望月町。そして、その中のトップクラスになっちゃったものですから、1976年に村が条例を制定して、健康管理活動を推進していくことになったわけです。その役場の保健係とか農協の生活指導員さん、また病院の健康管理部のスタッフたちの献身的な努力によって、村民たちが健康な村づくりへの取り組みにだんだんと目を開かされていくことになりました。

私たちの村はかなり働き者のお母さんたちが多く長い間にわたって鉄欠乏性貧血の度合いがほかの地区より高かったんです。それは、ほかの地区では集団健診で3%から4%の率であられるところが、うちの村は15%から20%ぐらいの非常に高い率で鉄欠乏性貧血があったそうです。私もその1人でした。この改善が何年もなかなか進まなかったんです。

そして、1987年になって、諏訪で合成洗剤中央全国大会というのが開かれました。そして、そのときの講演で、キビにはビタミンとかカルシウムとか、その上、鉄が含まれているということを話してくれた先生がいたそうです。ここで話を聞いた保健婦さんたちが、じゃ、貧血対策として村じゅうでキビを栽培して、そのキビを御飯の中にまぜて食べればいいということになって、農協の婦人部たちが中心になってキビの栽培をその年から始めました。そして、9キログラムの種キビが、その年は約7トンのキビになりました。1升のお米に対して湯飲み茶碗1杯ぐらいのキビを入れるということで、それを食べ始めてから貧血の度合いがぐんぐん下がっていった、それと同時に食べ物ということについても気

を使う女の人がたくさん出てきまして、貧血というのが急激に減ってきたわけです。ちなみに、私はキビは食べなかったんですが——というのは、キビは、おかまをあけたときにちょっとにおいがあるので、やっぱり家族が嫌がりました。それで、私はキビを食べなかったけれども、どういうわけか鉄欠乏性貧血は治ってしまっています。

そして、このキビの効用が農協の新聞とかに報道されたとき、全国からかなりの反響があったといいます。そして、うちの村へキビを送ってくださいという注文が舞い込み始めて、その年の注文で日本全国に5トン発送したそうです。今、村の特産品のようになっているんですけれども、全員が婦人で運営されている村の加工所があります。この加工所からお豆腐やお焼きやキビもち、そしてキビおこわなどが生み出されて、村の温泉施設に卸されて、そこからたくさんの人に販売されているというふうに、村おこしの小さな土台の一つになっています。

そこで、またケアポートみまきの方のお話に戻りますと、1983年に老人保健法が施行されたのをきっかけにして、小諸、北佐久地区で高齢者問題がにわかにクローズアップされてきました。老人の介護施設がそのときにはまだなかったんです。それで、住民運動が燃え上がり、老人の介護施設を考える小諸・北佐久地区住民連絡会議というのが86年に結成されました。それは、行政主導型というよりも、住民たちが、老人の団体だとか、婦人部だとか、一般市民だとか、そういうごく当たり前の住民の代表たちが集まって、住民主導型で考える会という趣旨で結成されました。

その会が1987年になって、我が村でも農協婦人部を初め各種団体が呼びかけ人になって介護施設を考える——ここでもまだ「考える」なんですけれども——北御牧村住民連絡会議というのを結成しました。そして88年

になると、この連絡会が、介護施設を考える会から作る会に名称を変え、いよいよ村に施設を運動を作る運動が始まったわけです。その少し前に小諸厚生総合病院、農協病院ですが、ここではデイケア施設こまくさが開設されました。ここで小諸の近くのお年寄りとは昼間過ごすことができ、地域のセンター的なところになっていたんです。

その開設とともに、今度はそこでボランティア教室が開校されました。もしうちの村で介護施設ができた場合、ボランティアとして多分受け皿が必要になるだろうということで、我が村の農協の婦人部のメンバーたちの何人かはここにも参加して、卒業していています。その後ですけれども、役場や農協や、そして村民が運動に参加して病院の協力も得ながら社会福祉法人みまき福祉会というのがうちの村に結成されました。そして、その後、県や村や住民の寄附や他町村の援助により最大の援助者が日本船舶振興会というところからでしたけれども、総工費23億円のケアポートみまきというのが95年2月に完成しました。延べ床面積が6337平方メートル。うそか本当か、職員たちはその施設の中を自転車で走り回るほど忙しいし、広いなんて言っていますけれども、私は自転車で走っている職員を見たことはありません。

だけれども、ここに収容できる人数は、ショートステイも含めて、60名ほどしかないんですね。我が村だけでいえば老人のみの家族及び独居老人が240名ほどいますから、もしこの半分の人が将来入所を希望したとしたら、この施設はもうお手上げの状態になってしまいます。その所長さんは、ここで多くの養護を必要とするお年寄りを見ていて、まず、家族のきずなをもう1度見直す必要があるということを言われます。それと、日本人には、自分も老いる、自分も死ぬときが来るんだと若いころから考えられる人はほとんどいないということも言われます。さらに、お

年寄りの体のことばかり問題にして心の問題を考えていない。この三つをよく言われています。どんなによい施設があっても、家族と切り離された年寄りというのはすごく寂しい。家族も、入れっぱなしにすればとても自分たちは助かって、楽かもしれないけれども、家に連れ帰ることを考えないことが多く、施設や世話人に文句ばかり言っていたりすることもあるらしいです。だから、設備のよい施設の中にいてもお年寄りは決して幸せにならないんだよということを所長さんはおっしゃっています。

だから、最初開所した当時、夜になると看護婦さんと呼ぶベルが何回も何回もいろんなところで鳴って看護婦さんがへとへとになったというのは、お年寄りが個室ということでやっぱり寂しいので、看護婦さんにそばにいてほしいという願いがそのベルの音であったみたいでした。

また、これも所長さんが言われたことなんですけれども、日本には福祉の哲学も理念もない。若者や壮年層の人たちが、今の老人の惨状がやがて自分の将来の姿なんだという認識を持って、そして看護に当たるなり、養護施設を使うなり、そういうことを考えていかなければいけないということもよく言われています。だから、日本の教育を変え、子供を変えていかなければ、日本の将来というのは全く真っ暗だということですね。

我が村でもボランティアでここへ1日に2人ずつ派遣されるように組んであるそうですけれども、そこに行っているのはやはり50歳代以上で、60代の人はかなり多く行っています。子供たち、中学校、高校の学生たち、それから男性の参加はまだ極めて少ないみたいです。だから、そういうこともこれから私たちが考えて変えていかなければいけないと今感じています。

### (3) 村の生活環境の変化と後継者問題

それで、前の方で我が村でも農業後継者のゼロの年が続いているということをお話ししましたけれども、私もたまたまいとこと結婚して長野に住み、一緒に養豚場を経営していくようになったんですけれども、私の子供が稼業を継いでくれるかどうか。そのところがどうも、やはり絶望的かと思っています。子供が5人いて、3人が息子なんですけれども、それぞれ自分の道があるような感じで、娘たちもそれぞれ希望があるみたいで、私たちが年をとった際には養豚場を閉めるか、または何か別の方法で続けていくか、考えなければいけないときがきくと来ると思います。そして、私が住んでいる今の地域。昭和40年代の中ごろにあの養豚場が開かれたときは、あたりはまだ荒地や林で、本当に苦勞して苦勞して大きな石を出し、木を切り倒し、平らにして養豚場をつくり上げてきたらしいんですけれども、今その地域がうんと大きく変わろうとしているんです。だから、将来、同じ場所で養豚場を経営していけるかどうか難しくなるのではないかと思っています。

それは、私の住んでいる切久保地区というのは、地域の開発の中心地になってしまっているからです。我が村のすぐ隣にあった林が削られて、流れていた小さい川は地下に潜らされて谷が埋められて、今、テニスコートとゲートボール場。北陸新幹線もちょうどその切久保地区を通ります。

このように、うちの養豚場も今の土地でこれから20年も30年もやっていけるかといったら、ちょっと不安になるようなところがあります。

たまたま二、三日前の信濃毎日新聞ですけれども、シングルライフという欄がありまして、40代の農家の青年の話が載っていたんですよ。それは、若いときにお嫁に欲しい女の子がいたんだけど、農家は嫌だという

ことでどうしても承諾してもらえなくて、その次につき合っていた人も農家の長男ということがネックでだめになって、稼業が結婚のネックになっているということは親にとってもうんと悲しいことだし、自分にとっても悲しいことだというふうなレポートが載っていました。結局、農家の後継者問題というのは、多分そこにつながってしまうことだろうと思います。

だから、何か百姓をやりたいとか、農家に嫁ぎたいとか、農家に就職したいという人をもっと大規模に募集して、それがうまく日本の農業を支えていくような力になるような、そんな夢みたいなきがでできればいいななんて私も考えることがあるんですけどもね。今、水田をやっている人も高齢者が多いです。

若い人たちは、土日にかけて水田をやっていますけれども、本当に水田だけではもうやり切れない。ことしも村は30%の減反ということで、だから、3割収入が減るなんていうことになると思うんですけども、農業がどんどん衰退していったり、農業後継者に恵まれなかったりする日本の今のあり方。やっぱり国の政治のあり方や教育のあり方ということを変えてほしいな、私は村に住んで本当にそう願っています。だから、この前、お米騒動があったけれども、いつ何どきお米が足りなくなるかわからないんだから、私なんかはお米を作っていないから思っちゃうのかもしれないけれども、減反などしないでほしいな、備蓄しておいてほしいなと思うんです。

私も養豚場を経営しながら、苦勞して育てて大きくしたその豚が、1頭2万円代のときもあります。そうかと思うと、1頭4万円代に乗っちゃうときもあるんですよ。安いときの方がうんと長くて、高い時期がうんと短いです。だから、結局は余りもうからないんですけども、1頭につき1万円もの差があると、その1カ月で100頭か120頭出荷

するとなると、それだけでもう100万から120万円くらいの減収になってしまいます。だから、ばくちみたいでおもしろいと思う人もいるかもしれないけれども、ばくちじゃないですよ。だから、好きで農業に就職するならともかく、うちの子供たちがもし、僕は違う道へ進むと言ったら、それをどうしても引きとめるだけの魅力と力がやっぱりないのではないかというのが、今、私、一生懸命畜産をやっているながら、ちらりと胸の中をかすめる思いです。

あと、農業がだんだん衰退して、限りなくゼロに近づくのではなくて、本当に農業に就職したいという人が日本の中にはいないのか。そんなことをちょっと考えてしまうんですけども、やっぱり学校の教育のあり方、それから、本当に農業に腰を入れるよう政治が動いてくれたら、若者の気持ちは変わるんじゃないかなんていうこともちょっと期待しています。

つたない発表で失礼いたしました。(拍手)

座長 どうもありがとうございます。

ご自身も農業を経営なされて、その周りで起こったようなことに触れられたかと思うんですが、現在の日本の農業の問題点がかなり身近にあるのではないかと思います。一つは、後継者がいないということ。なおかつ、その後継者にお嫁さんが来ないということ。当然ながら、新しい人がいなくて、どんどん高齢化していつてしまっているということですね。それを何とかなくちゃいけないということで、特別養護老人施設なり何なりの施設が必要になってきて、それをどう運営していくかというような地域ぐるみでの話になっているかと思います。

事実関係だけに限ってですが、何かご質問がある方はいらっしゃいますでしょうか。

大脇(農村開発企画委員会) 何人で養豚場を経営しているんですか。

武井 主に私と夫と，あと職安から紹介されましたハンディキャップのある青年と2人の子供のお母さんでやっています。

座長 それでは，第3報告として，山形市

の斎藤たきちさんから，ご自身のこれまでの体験を踏まえて，地域活性化のお話をしていただきたいと思います。

それでは，よろしくお願いします。